

其消息の端に書付く。

筆の海こぼりし水もとけそめて春の光をあふぐけふかな
基庸より、返しとはなくと詞書して。

水ぬし心の池のとけそめてたえずなぐるゝ水ぐきのすゑ
十九日基庸の許へ申傳ける。入木道のかしこき御おしへを
請侍りて、幸身にこえておぼえけるまゝ。

傳へくるし道にたえせぬ嬉しさは只くみてしれ水莖の跡
一、高野山三昧院の短冊

廿九日。高野山金剛三昧院什物の短冊の事、去年後藤理兵
衛光邦に就て願の趣有之、既に彼短冊等持參、去年以來在
留の處、頃日頻々被申越、其後信濃方より令達高聽候處、
此節か様の品召上候事は無之候得共、微妙公御所望の由緒
有之、其上彼寺院建立との品も有之儀に候條、願の通り黄
金三百枚可被遣候間、短冊可指越候旨、可申達旨被命。但先
づ短冊の目錄被_レ遂御覽候はん間、可有持參との御事也。
三月二日金剛院より短冊目錄到來。

光明院御製 尊氏 直義 爲明 爲秀 顯氏
師直 和氏 有範 廣秀 重茂 行珍 頼阿

御辨 慶雲 兼好等

都二十七人短冊數百二十枚、外醍醐三寶院僧正賢俊短冊一
枚有之候。抑此歌興行之事者、尊氏公釋迦全身舍利夢相に
付、其文字を題にして被詠云々。題各勅筆。卷頭尊氏卷軸
并跋直義被筆云々。

一、常照院と西行寺の花
上野常照院の櫻花一枝落手。其枝を分て基庸へ遣すとて書
つく。

櫻花むかしながらの色に香にいとゞしのぶの岡の邊の松
返し

伊呂に香にむかしおぼえて櫻花誰を忍ぶの岡に咲くらん
彼花に對して

一枝としたひしさへも中々ににくやしき程の花の色かな
藤の光英法師より消息到來。頃日賀茂の西行寺とめこかし
の梅、盛なるよし申つるまゝまかぬ。せめては香をだに
とて、花二三英包みておくりぬ。不堪愛玩のあまり、とめ
こかしの五文字を、折句にして思ひつゞく。
取わきてめづるに堪ぬ此の花の香にこそいと忍ぶ古へ

おなじく題にして

月もまた梅の匂ひをとめこかしひとり昔をしのぶ侘しさ
一、東叡山の花見にまかりて

上巳に廣徳寺より歸路の序、東叡山の花見侍るべきとて、
永井正良・村愛清誘引、東阪より登山、所々一見す。漸く花
散て若葉まじれり。院々の花無雙の壯觀なり。殊に圓覺院
の庭勝景の間、愛清誘引かしこにいたる。路頭の櫻花薫風
紛飛不堪感慨。例之瓦礫に及ぶ。

かすみして春の光の長閑さも今日こそ花の陰にしらるれ
わすれじよや、散初る花の香も袖にみちくる春の山かぜ
抑圓覺院の花の事、殊存舊懐却幽幽情者也。

此十とせ餘りふりはてし春、此寺にいたり花みし事の有り
しに、其頃打つれ侍りし友だち、ふたりはなくなり、外は
思ひの外なる事にて、かけはなれ侍りける。むかしながら
の花の陰も、中々つれなき程にて詠侘びぬ。かへり來てつ
くゝと思ひつゞけ侍りける。

古へを戀ふれば袖におもほへず花にしられぬ露ぞ零るゝ
ながめてもあらぬむかしの夕影を花にぞつぐる入相の聲

忍びかね花にもそゞ涙かな袖ふりはへしいにしへの春
跡ふりて夢かと思ふ古へに面かはりせぬ花ぞつれなき
夕落花

花の香は今をせにけんやまさくら風に吹まく春の夕ぐれ
一、賞春嘉會の詩歌

昨日直清の許より、今朝は櫻井故知可忌日たるにより、其
子知親寺院に詣てかへるさに、花を手折て入來し間、助信・
基庸等を招て、賞春の嘉會賦詩詠歌とて懷紙落手。予昨日
は右の故障にて今日及和答。

花下與友人酌酒 鳩巢 主人

隣人有意折花來。相對殷勤停酒杯。吾生縱得古稀壽。自此
逢春三十回。基庸云。吾生雖保七十之壽。自今看花
不逢三十回。生當實歎久之。故詩及此。

助 信

興來緩步訪騷人。一朵櫻花照眼新。樽酒題詩無俗事。風流
猶勝故鄉春。

折花入隣家 知 親

寺院香林春寂々。路傍立馬折花還。騷人報我有佳句。幸得
樽前半日閑。